

B 項目

Aの3.1.で記したように記述作業は語形変化のリストアップから始まるが、手がかりがないとどこから手を付ければよいのか難しい。ここでは手がかりにするための項目リストを挙げる。

- (1) Cの資料の動詞語彙リスト(C-2)と文法形リスト(C-1)の中から基礎的と判断されたものを選択し、それらを組み合わせた。
- (2) したがって、それぞれのリストの番号(コード)の組み合わせで項目が指定される。ただし、形容詞と形容動詞については、今回は語彙リストを用意しなかったため暫定的に01, 02のようにコードを与えている。
- (3) 各項目が『方言文法全国地図』ならびにその準備調査の活用関係の項目に一致する場合にはそれらの質問文を提示した。質問文末尾の番号は、各調査票の質問番号で、Pが付くのはそれが準備調査票に基づくことを示す。
- (4) 文法形リストには優先度に2段階(最優先 = \*\*, 優先 = \*)設けた。\*マークが多いほど優先度が高い。\*マークを目安に最優先から順次手掛けることで、次第に詳しい全体像が明瞭になることが期待される。
- (5) 次の順で配列している。
  1. 品詞は、動詞・形容詞・形容動詞の順にした。
  2. 各品詞の中では、文法形(カテゴリーの枠組み) / 語彙の順で配列した。したがって、同じ文法形の中で語彙が入れ替わり現れる。
  3. 文法形は、優先度の高いものを先に配列した。
- (6) 配列をもとにして項目に通し番号(コード)を付した。このコードを DGC(Dialect Grammar Conjugation catalogue)ナンバーと呼ぶ。
- (7) 語彙コード、文法形コードについては、Cの各リストとその説明を参照のこと。
- (8) (5)の2.のように文法形ごとに語が入れ替わり現れるが、実際の調査では文法形を優先にすべきか、語を優先してさまざまな文法形を入れ替えるのがよいかは、一概には言えない。ただし、はじめて調査する方言では、文法形優先にして少数の語を入れ替えながらおおまかな体系を把握し、詳細な体系が把握できたら、それぞれの活用のタイプに所属する語を見極めるために語を優先して進めるのが有効なように思われる。もっとも、インフォーマントの志向に左右されることもあるだろうから、目的や状況に応じて、使い分けるのがよいだろう。
- (9) ここで文法形と呼ぶのは、文法カテゴリーの枠組みを指す。具体的な文法形は個々の語で異なるのは当然であるので注意してほしい。また、実際に現れる助詞・助動詞はそれぞれの方言で異なり、さらにそれに対応して、カテゴリーが分岐することや、無効な場合もある。対象とする方言の事実にあわせて、枠を細かくするなり、飛ばすなりして、利用するとよい。